

# USR 與日語教育

## —日本語文學系的新嘗試—

賴雲莊

東吳大學日本語文學系 副教授

### 摘要

教育部於 2017 年開始推動大學社會責任實踐 ( University Social Responsibility ) 計畫，聚焦在地連結、人才培育、國際連結等面向及各項議題。東吳大學日本語文學系於 2020 年 5 月至 12 月間，與位於大學附近的「北投溫泉博物館」合作，進行 USR 計畫。正值新型冠狀病毒疫情蔓延，本次的計畫在施行上有著諸多限制。在這次的 USR 實踐中，增加了日本語文學系學生對於本國文化的認識，透過與地區的交流促進大學的社會貢獻。更促使學生將所學的本國文化認識，應用在日文學習上；同時也將新的可能性帶入台灣的大學日語教育中。本論文論述計畫進行過程之教育意義，並提出計畫實踐時面臨的困難點及今後課題。

關鍵詞：USR、日語教育、本國文化教育、大學社會責任、北投溫泉博物館

受理日期:2022 年 03 月 01 日

通過日期:2022 年 05 月 13 日

DOI: 10.29758/TWRYJYSB.202206\_(38).0005

# **USR and Japanese Language Education: A New Approach in the Department of Japanese Language and Cultures**

Lai, Yun-Chuang

Associate Professor, Department of Japanese Language and Culture,  
Soochow University

## **Abstract**

In Taiwan, the Ministry of Education has been promoting the concept of University Social Responsibility (USR) since 2017, focusing on "regional innovation and development", "human resource development" and "international linkage". From May to December 2020, the Department of Japanese Language and Cultures of Soochow University developed a USR project with Beitou Hot Springs Museum. This project was carried out under restricted circumstances as the Coronavirus disease 2019 (COVID-19) was raging around the world. Through this experience, not only did we achieve results in Japanese language education, but we also made a social contribution by promoting exchanges with the local community. At the same time, it also promotes university students' understanding of their own culture and brings new possibilities to university Japanese education in Taiwan. In this paper, we discuss the process of the project, and present the difficulties and future issues faced in the implementation of the project.

Keywords: USR, Japanese language education, university social responsibility, own culture, Beitou Hot Springs Museum

# USR と日本語教育

## —日本語文学科の新しい試み—

頼雲 莊

東呉大学日本語文学科 副教授

### 要旨

台湾では 2017 年から教育部が USR (University Social Responsibility)、「大学の社会貢献」概念を推進し、「地域連携」「人材の育成」「国際連結」などに焦点が当てられてきた。東呉大学日本語文学科では 2020 年 5 月～12 月にかけて、大学の近くにある「北投温泉博物館」を中心に USR プロジェクトを展開した。新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るっている中、制限された状況でこのプロジェクトが実施された。このような実践を通して得られた日本語教育の効果、大学生の自国文化理解の推進、また地域との交流で促進された社会貢献などは台湾の大学における日本語教育の新たな可能性をもたらす。本稿では、その実践の過程を検討し、さらに実践の際の問題点と今後の課題について考えていく。

キーワード：USR、日本語教育、自国文化教育、社会貢献、北投温泉博物館

# USR と日本語教育

## —日本語文学科の新しい試み—

頼雲莊

東呉大学日本語文学科 副教授

### 1.はじめに

台湾では 2017 年から教育部が USR (University Social Responsibility)、「大学の社会貢献」<sup>1</sup>概念を推進し、「地域連携」「人材の育成」「国際連結」などに焦点が当てられてきた。東呉大学日本語文学科では 2020 年 5 月～12 月にかけて、大学の近くにある「北投温泉博物館」を中心に USR プロジェクトを展開した。「北投温泉博物館」は 1913 年築造のかつて東アジア最大の公共温泉浴場だった建物で、北投と日本統治時代の歴史文化を知るうえで大変重要な歴史建築物である。

これまで東呉大学日本語文学科は、「日本語に精通するとともに日本についての理解を深め、国際的視野に立った台日文化交流が行える人材の育成」<sup>2</sup>を教育目標として掲げてきた。それぞれの学年では主として日本語の授業が中心だが、同時に日本学に関連する授業もデザインされている。「台日文化交流が行える人材」の育成に現在行われている履修科目<sup>3</sup>がふさわしいかを常に検証していくためである。このような取り組みと USR プロジェクトをセットで考えられないかが検討され、日本語を専門的に学ぶ一方でわれわれはどのよう

---

<sup>1</sup> 教育部推行「大學社會責任實踐 (University Social Responsibility,USR) 計畫」, 聚焦在地連結、人才培育、國際連結等面向及各項議題, 期許 USR 計畫在大學社會參與中扮演重要角色與推手。鼓勵發揮專業知識及創意, 改善學用落差; 促進在地認同與發展, 進而邁入接軌國際之願景。https://usr.moe.gov.tw/about-1(20210817)閱覽。

<sup>2</sup> 東呉大学日本語文学科ホームページ。https://web-ch.scu.edu.tw/japanese-jp/。(20220222)閱覽。

<sup>3</sup> 履修科目は「日本語に関する基礎的な内容の他、日本語研究、日本文学、日本文化、日本現代事情などの専門的科目に加え、日本語の通訳と翻訳、日本語文書処理、インターネット活用などの実務的な科目」もある。東呉大学日本語文学科ホームページ、https://web-ch.scu.edu.tw/japanese-jp/web\_page/116。(20220222)閱覽。



に USR の求める社会貢献ができるか、また USR を日本語教育にどのようなようにつなげられるかが課題となった。そこで、「結合日語教育之北投温泉歴史與觀光資源認識及創生:以新北投地區為中心」(日本語教育に結び付いた北投温泉の歴史、觀光資源の認識および地域創生:新北投地域を中心に)をテーマとして、学内の小規模プロジェクト(高教深耕計畫子計畫:東吳大學教師社會責任實踐計畫)で7か月間の活動を行った。このような実践を通してどのような効果が得られ、それが台湾の日本語教育にどのような意味があるかを本稿で確認し、さらにその実践の際の問題点について考えていく。

## 2.地域の連結と日本語教育

地域の連結と日本語教育との関連についての先行研究はいまだ少ないが、日本語教育における自国文化の重要性については、頼(2012)は「地域別日本語教育の見地」から「自文化と目標言語の文化を比較することによって異文化交流能力を身に付けることが大切」<sup>4</sup>だと強調してきた。また、林(2016)は「日本語学科における自国文化の教育の大切さ」を強調し、「自国文化に関する科目のコースデザイン」に力を注いだ。<sup>5</sup>さらに、「日本語学科は複数領域を跨ることにより、活性化を与え、より魅力あふれる学科になるであろう。付加価値が高くなれば、多様化した日本語教育の発展に寄与する転機とな」<sup>6</sup>るとその価値を説明している。両氏ともに自国文化と日本語教育との関連性を強調してきた。「複数領域」を跨ぐことの実現は、USRプロジェクトの特性を生かすことにより達成できるのではないかと思われる。

林(2014)は、龍山寺を日本語教育における自国文化を説明する対象として取り上げ、その関連の指導をする際に日本語教師の直面

---

<sup>4</sup> 頼錦雀(2012)「異文化交流能力育成を目指した日本語教育観」『台湾日語教育学報』19、台湾日語教育学会、p.20

<sup>5</sup> 林長河(2016)「台湾日本語学科の自国文化に関する科目のコースデザイン」『台大日本語文研究』32、台湾大学日本語文学系、p.142

<sup>6</sup> 林長河(2016)前掲論、p.160

する困難点を指摘している。

この側面の資料収集と調査は宗教学の領域に跨る学際的な研究になる。日本語教師の語学知識だけで効果的に説明できるものではない。その上、資料は中国語で表現されるとすれば、日本人のかわりやすい表現は、どのように抑えたらよいか、といった言語文化面の比較対照の作業も進められることが期待される。<sup>7</sup>

日本語教師は自国文化を日本語で紹介するときに、日本語能力だけではなく膨大な自国文化に関する知識が問われることが、この論述で示唆されている。しかし、日本語教師がこれらのすべての自国文化を説明するための知識を身に付けることは困難であろう。USRの持つ可能性を応用すれば、このような日本語教師の負担の軽減が期待できる。

林（2016）では、日本語学科における自国文化に関する教育の現状調査をするため、「台湾観光景點導覽」「台湾文化日語導覽」「観光日語」「日語會話(四)－観光導覽日語會話」などの科目の授業の実態についての調査が行われている。そこからは、それぞれの担当教員のコースデザインに注いだ努力が窺える。それと同時に、台湾の日本語学科は、自国文化教育の実施にあたって「観光」にやや重心をおいていることがわかる。自国文化の理解の認識は、学生の進路の一つである「観光」業界に応用できる大変堅実な認識ではあるが、観光業の人材の育成だけではなく日本語学習にも価値があり、それに大学の社会・地域貢献につなげることについての研究の成果はまだみられていない。本論では、これらの自国文化教育の研究成果を踏まえて、実践したUSRプロジェクトの内容と成果を述べていく。

---

<sup>7</sup> 林長河（2014）「龍山寺を例にした自国文化を説明する日本語教育の模索—語学教育理論の応用と課題」『台湾日本語文学報』35、台湾日本語文学会 p.370

### 3. コロナ禍／下の USR プロジェクトの実践へ

今回のプロジェクトは、日本語文学科の教員 8 名（台湾人 6 名、日本人 2 名<sup>8)</sup>）を中心にして展開したものである。2019 年年末以来、新型コロナウイルスが世界中で猛威を振るっている。2020 年に入ってから、水際作戦により外国人観光客をはじめとした台湾を訪れる外国人の入国が厳しく制限された。そのような状況下で、プロジェクトが実施された期間中、学生たちはマスク着用のうえで「北投温泉博物館」に通うようになった。また、当初計画していた日本人向けの館内日本語ガイドの実習は、日本人観光客がほとんどおらず、また人と人の密集・密接を避けるためもあり、取りやめとなった。今回のプロジェクトは新型コロナの世界的蔓延下、諸制限の中で実践された活動と言えよう<sup>9)</sup>。以下、その実施状況を大きく、3.1「地域認識を高めること」と 3.2「地域のための学生の貢献」の二つに分けて説明する。

#### 3.1 地域認識を高めること

林（2014）は台湾の教育・言語政策を整理したうえで、大学生の「高校までの「自国文化」教育の貧弱」<sup>10)</sup>について指摘し、「日本語学科の学生たちが日本からの訪問客に対して、台湾の文化を説明するのに十分な知識が身に付けられていないという危惧がある」<sup>11)</sup>と説明している。北投は日本統治時代（1895 年～1945 年）から温泉観光地として開発された地域である。しかし、日本語文学科の学生は日本に深いかかわりをもつ北投の歴史、温泉文化などについての地域認識の知識が不足している。このような状態では、学生が日本語

---

<sup>8)</sup> チームメンバーの教員は次の通りである。頼雲莊副教授（責任者）、林雪星教授、陳美玲副教授、黃智暉副教授、林蔚榕助理教授、陳若婷助理教授、山本卓司助理教授、石井郁江非常勤講師。

<sup>9)</sup> コロナ禍で種々の実施制限があったが、コロナ蔓延中、夏休みの海外旅行などが制限される中、学生参加者の確保ができた。普段なら学生はバイトや旅行などの多彩な大学生活を送っており、それによって課外活動の参加や集まって活動するための時間は常に圧縮されている。そのため、自発的にそうした活動に参加する意欲が低下している傾向がある。今回はコロナ禍の影響で、学生の参加が確保されたと言えよう。

<sup>10)</sup> 林長河（2014）前掲論 p.356

<sup>11)</sup> 林長河（2014）前掲論 p.357

どころか中国語でさえ北投を紹介、宣伝、またはガイドするのは無理があろう。その地域認識を高めるために、大きく分けて二つの活動を行った。

### 3.1.1 ボランティアのための講習会に参加

この活動は、大学の夏休み期間中に行われた。学生が「北投温泉博物館」の主催で毎年行われる館内ボランティアガイドのための講習に参加するというものである。館内ボランティアの参加枠に影響を与えないように、各講習ではそれぞれ 20 名ずつの学生が参加した。その講習の内容は表 1 の通りである。その講習内容は「北投温泉博物館」のボランティアガイド向けのもので、特別に学生のために設計したものではない。

表 1 2020 年度に「北投温泉博物館」が開設したボランティアガイドの講習会 (2020.7~8)

講座のテーマ	内容要約
A 老照片看北投温泉飯店	昔の写真によって、温泉旅館の変化の歴史を語る。
B 北投陶瓷産業與北投燒	かつて栄えていた北投焼と陶磁器についての紹介。
C 北投廟埕與獅陣文化	北投の廟の広場と獅子舞の文化についての紹介。
D 曾經、台灣有個好萊塢	北投は台湾のハリウッドと呼ばれた時期があり、多くの台湾語映画がここを撮影地にした。その歴史と背景についての紹介。
E 北投水道系統	日本統治時代、温泉産業の開発に伴った北投水道システムの建設についての歴史とその紹介。
F 再見北投温泉鄉	北投温泉郷についてのストーリーを語る。
G 森山松之助與經	「北投温泉博物館」の建築家である森山松之

典作品	助とその建築作品の特色についての紹介。
H 台湾日式建築	日本の建築と台湾の日本建築の特色についての紹介。
I 北投眷村温泉文化	北投の温泉地に位置する中心新村（1950年代前後中国から移住した軍人の眷属の住居）と衛戍病院についての紹介。
J 温泉洗浴文化	温泉文化と芸妓文化についての紹介。
K 一起走在十年臺灣月琴民謠祭的路上-生根、傳承、創新	台湾の伝統楽器月琴と「臺灣月琴民謠祭」10周年についての紹介。

表1からわかるように、その講習の内容は北投の郷土学をはじめとし、日本統治時代からの建築、水道、陶磁器、日本の温泉文化などであった。参加者の26名の学生は計22時間の講習から各自16時間を選びそこで専門家に学ぶ。講習は博物館のボランティア（参加者の65%が65歳以上）と一緒に聴講するもので、若い学生と高齢世代の交流の場となった。例えば、世代差による生活体験の相違によって受講者から講師への質問内容は大きく異なっていた。相互の質疑応答を通して世代間の交流が行われたのである。このような交流は当初予想しなかったもので、大学での教育現場とは異なった学びの場となった。このような学びの環境は、参加学生に多様な刺激をもたらしたようである。それまでの日本語文学系のカリキュラムにあまりなかった試みである。「日本語学科では、日本語と日本文化を勉強することが当たり前だと思われており、「自国文化」の教育やトレーニングは、今まであまりなされていない」<sup>12</sup>という林（2015）の指摘がすでにある。この講習は、その不足している自国文化の教育の実践の場である。

<sup>12</sup> 林長河（2015）「自国文化紹介のシラバス作成のためのニーズ調査—艋舺龍山寺を例に一」『天理台湾学報』24、天理台湾学会 p.75

例えば、E「北投水道系統」の講習では、日本統治時代に建設された北投地域の水道システムについて説明している。水道システムは温泉の開発で観光地として栄えた北投地域に使いやすく清潔な水を提供しただけではなく、同時に台湾人の生活史に変化をもたらした。公衆衛生の改善に伴い、蔓延していたコレラやマラリヤなどの伝染病の防疫が進み、市民生活の質の向上にも貢献する。また、学校や病院や公園などの公共建築は水道が行き届いている場所に設置されている。それはこれらの場所には清潔な水が確保されていることが必要だからである。さらに、水道システムに関連する施設も紹介されている。現在北投公園にある二つの噴水（図1、図2）がそれである。その噴水は公園の景観のためだけのものではなく、実用的な役割がある。北投の水道システムの水源地は山にあり、噴水は水道システムの下端に位置している。その噴水には、水道送水パイプの水圧を調節する機能があるのである。そして、公園という広場になっているところは、災害時には避難施設にもなる。地震などの災害の発生時には、噴水から湧き出す清潔で飲用可能な水が避難者の命を維持するのに大事な水源となる。



図1 北投公園の噴水①



図2 北投公園の噴水②

普段見慣れた古めかしい噴水にこのような実用的な役目があることを初めて知り、受講者は驚いていた。彼らは、見慣れた風景にそのような歴史があることや、百年以上の歴史がある公共建築が現在

も持ち続けている意味などを、この講習を通して学べた。参加者の目に映るその噴水はただの噴水であるだけでなく、その背後には深い生活文化史が存在していたのである。

また今回の講習で、この自国文化教育の学習に日本語・日本文化の勉強との接点があることを参加した学生たちが発見している。そのことは、講習完了後の学生のアンケートからわかる。

### 3.1.1.1 参加学生を対象に実施したアンケート

講習完了後、26名の参加学生を対象にアンケートを実施した。26名の学生の学年の内訳は表2の通りである。

表2 参加した学生学年の内訳

学年	人数	%
学部一年	4	15.4%
学部二年	6	23.1%
学部三年	14	53.8%
修士課程	2	7.7%

この講習は夏休み期間中に行われたものであるため、実施時の学部の学生の学年は実施時よりそれぞれ一つ上に上がっている。この表で示しているのは申し込み時点の学年である。人数が最も多いのは三年生で、日本語の基礎教育が固められた段階であるため、日本語に関連する応用的知識に興味を持ち、幅広くそれを模索しようとしている意欲が示されているように見られる。

実施したアンケートの結果は次の通りである。

①参加した動機。参加した動機（複数回答可）については、表3のような回答があった。

表 3 参加した動機（複数回答可）

参加した動機	人数	%
1. 北投のことをより知りたいから	13	50%
2. 台湾の文化と歴史に興味があるから	15	57.7%
3. ガイドの仕事に興味があるから	13	50%
4. その他（自由記述）	2	7.7%
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 日本統治時代の文化をより知りたいから</li> <li>• 講習内容に興味があるから</li> <li>• 「北投温泉博物館」に興味を持っているから</li> <li>• 日本語でのガイドのテクニックをより身に付けたいから</li> </ul>		

回答人数の最も多かったのは「台湾の文化と歴史をより知りたいから」（57.7%）で、半分以上の参加者がこの動機で申し込んだことがわかる。加えて、「北投のことをより知りたいから」の回答数は参加者数の半分（50%）で、総じて地域の文化と歴史について関心を持っている参加者が半分以上を占めていると言える。また、「ガイドの仕事に興味があるから」と回答した人も50%、半分を占め、ガイドの技能を身に付けて今後の職業につなげようという考えを持っている人も多いようである。

②「今後も引き続き北投のことに関心を持つか」という問いには88.5%が「持つ」と答えており、この講習が地域の歴史・文化に関心を持たせ、「知的的好奇心」を掻き立てるものだったこともわかる。

③「今回の講習は、専門の日本語学習に役に立ったか」という問いに、「はい」と答えた学生は57.1%であった。さらに、「役に立つ」と思う学生には自由記述の項目にその理由を書いてもらった。その内容は以下のようなものであった。



- 台湾文化と日本語のつながりがわかった。
- 台湾（北投）と日本とのつながりがわかった。
- 今後、昔の歴史についてより調べてみたくなった。
- 日本文化との関連付けがしやすくなった。
- 北投の歴史や観光スポットを簡単に紹介できるようになった。
- 昔の日本政府の北投での建設や経営についてよりわかるようになり、台湾の文化をより深く知った。

今回のプロジェクトの実施中には日本語語学学習についてほとんど直接的に触れておらず、この設問についても特に説明を行っていなかった。そのため、回答する際に戸惑った学生もいたかもしれない。しかし、「北投温泉博物館」での講習はすべて中国語で行われたにもかかわらず、それが日本語学習に役立つと感じられたということは、学生自身が自発的にこれらの地域理解を言語学習に必要なものと認識した証だと思われる。つまり、自国文化への理解は日本語学習に機能しているということが証明されたと考えられる。今回の講習ではコロナ禍のため館内ガイド案内の実習ができなかったが、林（2016）が述べたように「台湾の歴史や文化に関する知識が欠けており、そうした知識がなければ、日本語を使って紹介することは、無理な注文になる」<sup>13</sup>。歴史や文化に関する知識を身に付ければ、すでに習得している日本語力を武器に、日本人観光客を対象としたガイドをすることは難しいことではないと考えられる。

今回の講習で学生は実際に北投の地に通り、「百聞は一見に如かず」ということわざの意味を理解したであろう。北投という硫黄のにおいが漂う空間の空気を吸い、路傍の下水のマンホールから出てくる温泉の湯気を見、そこにある歴史と人文の深みを感じることができたはずである。さらに言えば、博物館の講習会では世代間の交流が行われ、違った世代の地域認識と理解のコミュニケーションの場（図

---

<sup>13</sup> 林長河（2016）前掲論、p.156

3、図 4) にもなった。こうした世代間の交流の促進も一種の地域貢献になると考えられる。



図 3 講習会実施の様子①



図 4 講習会実施の様子②

### 3.1.2 シリーズ講座の実施

夏休みの「北投温泉博物館」での講習の延長として、2020年9月の新学期開始後、大学で計9回のシリーズ講座（テーマ：「憶猶未盡—從北投出發，尋找台灣的日本記憶」）を始めた。

表 4 「憶猶未盡—從北投出發，尋找台灣的日本記憶」シリーズ講座  
(2020.9～12)

題目	内容分野
1.北投温泉發展與日本在台治理的影響軌跡	歴史文化
2.北投與天母的文化資産及台灣水道保存運動	公共建設
3.臺灣有個好萊塢：從日治到戰後的臺語電影夢	歴史・芸術・映画
4.温泉與文學	文学
5.漫談台北近代建築	建築
6.北投陶瓷産業歴史與北投燒	生活史・陶磁器
7.臺灣古寫真上色—找回北投記憶的顏色	歴史・古写真(モノクロ)のデジタル修復

	(カラー付け) 技術
8.日本の温泉文化とおもてなしの心	温泉文化
9.讓台灣更美好—那些年，為台灣付出貢獻的日本人	歴史

表4の示している通り、このシリーズ講座には多岐にわたる台湾の歴史文化や日本とのかかわりの知識などが含まれている。東呉大学の日本語文学科の主催する講演会では初めての形態のもので、これまで重視してきた日本語語学・日本文学・日本語教育の分野とは違った領域の専門家による講演である。学際的な交流が進むことになり、日本語教育における自国文化教育の実践となった。

この講座は参加者を全学に向けて募集したもので、自由参加の講演会である。日本語文学科の学生をはじめ、全学から参加者がいた。週一回の講座は学内で反響を呼び、コロナ蔓延防止のため毎回の講演に人数制限がかかっている中、延べ750人ほどが参加した。北投の温泉地としての発展や歴史の変遷などをはじめとした、台湾の歴史や日本と台湾の文化を再認識するための学習になった。このこれまでにない集中的で多元的な台湾と日本の歴史文化についての講演(図5、図6)は、参加した教員と学生に大きな刺激を与えたと言えよう。



図5 シリーズ講座実施の様子①



図6 シリーズ講座実施の様子②

今回のシリーズ講座は特に単位を付与するものではないが、9回（計18時間）の講座は一科目の一学期の時間数に相当する。今後は教養（通識）科目のようにシリーズ講座でも単位の認定ができるように検討していきたい。

### 3.2 地域貢献につながる学生の学習成果

プロジェクトの後半では、学生に日本語での北投のPR動画（図7）の撮影と手描きマップ（図8）の作製をさせ、博物館の一部の展示を日本語訳する作業を行った。限られた時間でもあり、動画とマップはすべてが上出来というわけにはいかなかったが、各人の観察眼を通して見た北投は興味深いものであった。



図7 北投のPR動画



図8 手描きマップ

学生は館内展示の日本語翻訳作業にも参加した。本来は専門の翻訳業者に依頼するものであるが、館長の特別の計らいで新しい展示の一部を担当することになった。その担当部分は、過去と現在の温泉旅館についての紹介と、温泉博物館の建築および建築家についての紹介である。

翻訳の参加者は日本語文学科の学生を対象に募集し、そのほか東呉大学に留学中の日本人学生からも募った。21名（台湾17名、日本4名）の参加者の中には、夏休みの講習に参加した学生もいた。学年は一年生から大学院生まで幅広い。日本語力にばらつきのあるなか、四つの班に分け、一つの班に一人の日本人が入る形でそれぞれの担当部分の日本語訳を行った。台湾の学生と日本の学生がそれ

ぞれ母語話者としての強みを発揮し、協力し合い日本語訳を完成させた。すでに習得している北投に関する知識を基に、討論が行われた。その後、教員から確認と指導が入り、完成品を博物館へ提供した。このような翻訳活動を通して、学年の違った学生間の交流はもちろん、日本人留学生との交流も活発になり、言語学習以上のものが獲得できたと思われる。

このような地域性の強い館内展示の翻訳には、言語間の翻訳能力が問われるだけではなく、文化背景の把握がなければ適切に行えないところもある。たとえば、博物館の展示文の中国語には温泉に関する風俗産業の歴史が遠回しな言葉で書かれているものがあつた。温泉旅館で入浴などのサービスを提供する女性のことを称するのに、「女侍應生」という言葉が用いられている。「女侍應生」という表現は、北投の歴史を十分に把握していなければ台湾人でも理解できない言葉であろう。学生はその言葉を、「売春婦」「娼婦」といった日本語に訳したりした。近い意味の言葉であっても、歴史的な脈を踏まえれば完全に相当するものではない。その後、教師の指導が加わり原文の文脈に沿った訳文に修正された。ほかには、建築関係の専門用語や露天溪流での混浴と内湯の変遷、当時の貨幣価値などの学生が翻訳する際に困難を覚えたところがある。

こうした翻訳作業を通して学生は、機械的な翻訳だけではなく文化的背景の把握がなければスムーズに翻訳することができないことを理解できた。特に、その地域独特の歴史的な専門用語などの翻訳の難しさを実感したと言える。その難しさを意識したことも重要な学習成果だと思われる。このような理解のきっかけは教室を離れたところにあり、日本語教師の力だけではなく、地域連結という活動を通すことではじめて達成できたことだと考えられる。このことの重要性は、頼錦雀(2018)の強調する「台湾文化の日本語表現力」につながっている。

21世紀はグローバル化の時代である。グローバルな態度で世

界に目を向けると同時に、ローカルのことを世界に紹介することも大事である。日本語教育における文化指導に絞って言えば、今後、日本文化理解と共に、台湾文化の日本語表現能力の向上を図らなければならない。それには、地域別日本語教育学の心構えは必要である。<sup>14</sup>

今回の博物館の展示翻訳は、「ローカルのことを世界に紹介」することや「台湾文化の日本語表現力の向上」につながる、「地域別日本語教育」の実践とも言える。この実践は、従来のような教室での日本教育ではなく、USR プロジェクトという新しい試みによって確実に到達することができたものである。USR プロジェクトの実施は「地域別日本語教育」の促進につながる教育方法だと考えられる。しかしこのような実践は、一回きりの活動で達成できるようなことではなく、長期的かつ計画的に教育内容に織り込む努力が必要であろう。

その日本語の訳文は、未熟なところもまだまだあるが、博物館で公開された。学生の学習成果が訳文を通して可視化され、加えて翻訳が実際に博物館で展示されたことは、日本語を専攻している学生にとって大きな励みになり、達成感を覚えることもできたと思われる。

#### 4.残された課題

今回のプロジェクトは試行錯誤の中で実験的に実施した部分もあり、効果の検証方法を含めて課題が残った状態である。以下にその課題を整理した。

##### 4.1 単位と授業の統合

今回のプロジェクトの実行期間は5月～12月で、一学期（9月～1月）と二学期（2月～7月）に跨っており、プロジェクトの進行と

---

<sup>14</sup> 頼錦雀(2018)「台湾の日本語教育における文化指導—日本文化と自文化を中心に—」『台湾日本語文学報』44、台湾日本語文学会 p.142

同時に特定の授業をセッティングして推進することが困難であった。よって、今回のプロジェクトの参加メンバーの教員の授業の一部は、プロジェクトに合わせて行われた。下記の表5は、プロジェクトの関連授業の一覧とその実施状況である。

表5 プロジェクトの関連授業の一覧

科目名	学 年 ／ 必 修・選 択	実施された内容と予期される成果
日語聴 力訓練 (三)	三 年 ／ 必 修	<p>授業の内容を地域の文化に連結し、学生に地元の文化により関心を持たせる。</p> <p>北投の温泉歴史の紹介を授業に導入し、特に日本語の敬語表現に重点を置き、学生に敬語で北投のガイド方法と紹介を練習させる。学期末に学生に敬語表現を生かした北投温泉のPRビデオを作成させる。</p>
日語資 訊処理	三 年 ／ 選 択	<p>メディア制作を通して、地域文化の教養を深め、進んでそれを北投の人文歴史や観光に広げることを目標とする。</p> <p>「デジタルメディア制作」と地元の文化理解を結びつけ、学生の日本語力を向上させると同時に、地域理解も深めさせる。さらに、学生の今後の就職における競争力を高める。</p>
日語會 話(二) 日語會 話(三)	二年・ 三 年 ／ 必 修	<p>学生の日本語会話力を向上することを目標とする。学生の地域についての認識を深めることにより、北投の観光促進につなげる。</p> <p>学生の日本語による討論を通して、若い世代の観光地発展についての考え方や発想をまとめて</p>

		いき、さらに、若い観光客をターゲットとする観光宣伝戦略を練り上げる。学期末に日本語版の観光マップを作製する。
日本文 學研究	修士 一年 ／選 択	大学院の文学研究の授業に日本統治時代の北投関連の文学作品を導入し、文学作品から北投の地域性とその時代の台湾における温泉文化を考えていく。同時に、『台湾日日新聞』などの文献検索の方法も大学院生に習得させ、研究方法を身に付けさせる。

表5は今回のプロジェクトに協力する教員が知恵を出し合って考えた授業の内容である。前述したように、学年度とプロジェクトの時期が一致していないため、全面的に授業で実践することが困難であった。実際、北投PRビデオと手描きマップを完成させた科目もあれば、少ししか実践できなかった科目もあった。どのように正規の授業と統合させれば、USRの精神または日本語教育の効果の最大化を実現させられるかは、今後の課題である。

正規の授業とUSRの統合も大切であるが、今回行った学内のシリーズ講座の単位付の可能性も検討するべきものである。学生の卒業後の就職を考えれば、観光業界の即戦力を備えた人材の育成につながるだろう。それと同時にこれは、人文知の涵養に資するインテリの育成に重要な教養の養成にもなる。

#### 4.2 協力する地域団体のニーズと大学側のシーズ

今回のプロジェクトで特に困難を感じたのは、地域団体との協働を進めるにあたって、地域のニーズは何か、また、大学側から提供できるシーズは何かということであった。地域の中にあるニーズとシーズをうまくマッチングさせられれば、その取り組みは両者にとって有意義かつ効果的になるだろうが、そのために何が必要なのかを見出すことは短期間のプロジェクトの実施中には難しかった。日本語文学科から地域にどのような貢献ができるか、また、地域のい



ろいろな資源をどのような活用して教育に生かせるか、という問いがプロジェクトを実行の中で考えさせられた問題点である。

今回協力を得られた「北投温泉博物館」は、台北市指定の古跡（歴史建築物）であり、台北市文化局の管轄下（当時）にある。研究を担当する学芸員のような配属はない。つまり、この博物館とこの地域の歴史関係の文献調査研究が博物館で進められていないのである。頼ることのできる文献資料は、地域の郷土研究者や国内の各研究機関が産出している北投についての研究成果である。このような博物館の直面している問題点は、ある程度台湾の歴史文化遺産運営の現状を反映していると思われる。このような状況が今回の実践からわかった。しかし、今回のプロジェクトがこのような状況に有効なシーズを提供するところまでには至らなかった。地元の大学の資源とこのような歴史建築物の運営機関とがよい協力関係にあれば、地域団体と大学の双方にとって有益であろう。地域と連結と社会貢献をするために、互いのニーズとシーズの理解が不可欠だと思われる。

#### 4.3 歴史文化遺産の観光地化

台湾ではかつて 50 年の日本統治時代があり、その名残が今でも台湾人の生活（言語、文化、建築など）に散見している。現在の台湾の日本語学習者は、世界に例のない特殊な学習環境に置かれていると言える。

台湾には日本統治時代の文化遺産や歴史建築物が多数あるが、これらはかつて台湾の負の歴史を示すものとして、破壊されたり排除されたりしてきた。しかし、台湾社会の民主化が進展するとともに、台湾の歴史の一部として、保存や補修が行われ観光スポットや観光地になった場所も多い。だが、歴史的な場所がきれいな遊び場として整備されただけで、本来ならば得られるはずの文化や歴史の学びの場にはなっていないところもある。もちろん、様々な専門分野において長年その復旧に努力している専門家は多くいるが、これらの歴史的な場所を、観光客がそこで写真を撮って SNS にアップロードするための古い日本建築というだけのスポットで済ませないために、

日本語文学科の力をより活用する方法がないかと考えている。

今回のプロジェクトを通して、文化遺産の価値やその背後の文化的コンテクストを大学生に理解させることで、それを観光資源として見るだけでない、歴史からの深い学びにつながる新たな視点が得られたように思われる。いわば、無形の文化の認識を通して有形の文化遺産への新たな観察の立場が獲得されたのである。まだ微々たる成果であるが、これらの実現は、歴史文化遺産の深い理解と地域貢献・社会貢献活動の連携になり、大きな意義を持つことになるのである。したがって、今後ただの観光地としての認識と歴史文化遺産としての認識の間の落差を埋めるには、さらなる教育の力が必要となるであろう。

#### 4.4 諸領域の協力関係が必要

自国文化の教育を行う際の学際的な協力体制の重要性については、林（2016）がすでに提唱している。

自国文化の教育は、正真正銘の日本語教育の追求した教育実践である。日本語教育を元に、観光学の他に、宗教学、歴史学、文化人類学、社会学などの諸領域と関わっており、広範にわたっているため、協力体制が必要とされる。<sup>15</sup>

このプロジェクトの実践した活動は、「地域認識を高めること」と「地域のための学生の貢献」の二つに大きく分けられるが、一口に地域の認識といっても、実際広範にわたる学問が含まれている。前述のような水道の建設にまつわる水利関係の学問や建築関係の知識、植民地期の歴史、入浴文化などはそれぞれが専門の範疇に入る。今回の博物館の講習や大学でのシリーズ講座では、それぞれの分野の専門家が講演を行った。これらの多元的な講座においては、日本語教師では教えられないものが専門的な視点から説かれていった。こ

---

<sup>15</sup> 林長河（2016）前掲論、p.161

のような協力体制が日本語教育に不可欠なものであることが再確認されたのである。この実践を通して、USRプロジェクトと関わる日本語教育の今後の発展には違った分野の教員の協力体制が必要である。専門家の学際的な協力によって共同のプロジェクトを推進することが今後の課題になる。

#### 4.5 課外活動に参加する意欲と動機

今回のプロジェクトの実施は、主として夏休み期間中と学期中の課外活動としての進行であった。コロナ禍／下という状況でもあって、夏期の各種の海外活動が取りやめとなり、ほとんどの国際交流活動がキャンセルされた。そうした学生の活躍できるような場の減少も、今回のプロジェクトの参加者の確保ができたことの一因であろう。

北投 PR ビデオと手書きマップの作製の一部が授業で行われた以外は、すべて学生が課外時間を利用して活動したものである。昼休みや放課後の時間の利用、SNS を通しての討論などで少しずつ成果が生み出されていった。

近年、学科の主催する活動に対する大学生の参加意欲が低下している。毎年定例のカラオケ大会や演劇大会などの参加者は年々減る一方であるのが現実である。生活のためにアルバイトをしなければならないことやオンラインゲームに熱中することなどが、大学生が学内の行事や活動に参加しなくなっていることの原因の一部だといわれている。

今回の活動は、コロナ禍によって生じた時間的な空白が学生の活動参加に有利になるという逆説的な状況で行われた。そういった特殊な状況によらず、学生に魅力を感じさせ引き付けるような活動にしていくことが、今後のプロジェクトを計画する際の大きな課題になると思われる。

#### 5.おわりに

7 か月間の活動を通して学生の自国文化に対する知的好奇心を向

上させることができたことから、このプロジェクトは一定の効果が得られたものであったと言える。また、主として中国語を用いた地域活動であったにもかかわらず学生は日本語学習にも役立ったと考えており、言語学習を通じた地域理解として機能したことからも、今回の実践活動は台湾の日本語教育にも重要な意味を持っていることが確認できた。

本論で紹介した USR プロジェクトの実践はあくまでも限られた条件下（コロナ禍／下、7か月という短時間）での事例であり、より広い範囲に応用するにはさらなる検討が必要であろう。とはいえ、本実践の結果は上述したような活動の成果が一定の効果をあげうることの証拠として評価できよう。このような USR の試みは、教師にも学生にも収穫の多い経験となり、教育的な価値を有するものであった。初めての試みでまだ USR の方法を模索しているところであり、大学の社会的責任として地域貢献に直接つながる取り組みはまだ少ない。だが、今回の象牙の塔を離れたこのような取り組みは確実に地域貢献になったであろう。また日本語教育の立場からも、自国文化への認識を深めることで日本語学習効果の向上につながり、それをさらに地域貢献につなげていくことには大きな意味があると考えられる。さらにそれは、「台日文化交流が行える人材」の感性を育てる過程となったと確信している。この大きな目標は短時間で達成できることではない。参加者に自国文化の認識の種をまいて、いつかそれが日本語教育と社会貢献の大きな木になることを期待している。今回のプロジェクトによって、従来のような日本語文学科のカリキュラムだけでは到達できない日本語教育の領域を垣間見ることができたと言えよう。今後は、継続して諸分野に跨る協力体制を作ってプロジェクトを進行していくことを提言したい。

## 参考文献

頼錦雀(2012)「異文化交流能力育成を目指した日本語教育観」『台湾日語教育学報』19、台湾日語教育学会 pp.1-23

頼錦雀(2018)「台湾の日本語教育における文化指導—日本文化と自文化を中心に—」『台湾日本語文学報』44、台湾日本語文学会 pp.125-145

林長河(2014)「龍山寺を例にした自国文化を説明する日本語教育の模索—語学教育理論の応用と課題」『台湾日本語文学報』35、台湾日本語文学会 pp.351-374

林長河(2015)「自国文化紹介のシラバス作成のためのニーズ調査—艋舺龍山寺を例に—」『天理台湾学報』24、天理台湾学会 pp.73-90

林長河(2016)「台湾日本語学科の自国文化に関する科目のコースデザイン」『台大日本語文研究』32、台湾大学日本語文学系 pp.137-163

ウェブサイト

教育部大學社會責任推動中心ホームページ。

<https://usr.moe.gov.tw/about-1>。(20210817)閲覧。

東呉大学日本語文学科ホームページ。<https://web-ch.scu.edu.tw/japanese-jp/>。(20220222)閲覧。

謝辞 本プロジェクトの実施にあたり、「北投温泉博物館」の館長鍾兆佳氏をはじめ、ボランティアガイド隊長(当時)林冠瑛氏、館員劉慧萍氏、ボランティアガイドの皆様、関係者の皆様に多大なご協力をいただき、深くお礼を申し上げます。また、静宜大学の邱若山先生には、本プロジェクトの顧問として、多くのご助言と歴史資料のご提供をたまわりました。心より感謝を申し上げます。